

[研究報告]

夏目漱石の「私の個人主義」から見出す社会福祉思想

高 継 芬

【要旨】

明治時代の文豪夏目漱石が数々の作品を残している中で、「個人主義」を実践するためにどうすればいいのかについて語っている「私の個人主義」という作品がある。一見福祉と全く関係がないように見えるが、そこには社会福祉思想が潜んでいる。

「私の個人主義」は、漱石が大正3年に学習院で行った講演を筆記したもので、漱石48歳の時の作品である。漱石は、文章の中で個人主義を実践するためには三つの点が必要だと書いている。

- 1「自己の個性の発展を遂げようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならない。」
- 2「自己の所有している権利を行使しようと思うならば、それに付随している義務というものを心得なければならない。」
- 3「自己が全力を示そうと願うならば、それに伴う責任を重んじなければならない。」

なお、本稿は1と2について論じることとする。

アメリカの社会福祉学者であるF・バイステックは、社会福祉分野で個別援助による倫理的な実践原則を7つ述べているが、その中の一つに「個別化の原則」がある。そこでは人間は、具体的には個々の名前を有する個人として存在するとされている。したがって「人間の尊厳、個人の尊重」とは、具体的には「個別化」された人間を最大限に尊重すると同時に、尊厳を認めることでなければならない。漱石の「私の個人主義」の一つの論点と全く一致している、といっても過言ではない。

文学思想においても福祉思想においても共通しているところは、自分を尊重するだけでは他人を尊重しない限り「個人主義」というものが成り立たないことがわかる。

本稿は、夏目漱石の「私の個人主義」から見出す福祉思想を論じること、文学思想と福祉思想との関連性を検証し、「私の個人主義」が主張した思想に、「社会福祉思想」を見出すことが出来ることを検討する。

キーワード：個人主義、社会福祉思想、個人の尊重

I. はじめに

1. 問題設定

明治時代の文豪夏目漱石が数々の作品を残している中で、「個人主義」を実践するためにどうすればよいのかについて語っている「私の個人主義」という講演がある。その作品を精読する限り、イギリスで「個人主義」という概念を見つけた漱石は、しばらく模索した結果、個人主義を超える生き方を発見したのではないだろうか。

この「私の個人主義」は半世紀以上も昔のものだが、その思想は今日なお示唆するところが多く、日本の将来を探索する指針を含んでいると言っても過言ではない。漱石作品は繰り返し出版されているが、その要ともいえるべき講演集は日本国民の思考の基盤

となるとの評価もあり、漱石の思想に共鳴している人は今でも多く存在するだろう。本稿はそうしたことを勘案し、現代人はそこに示されている漱石の思想をどのように生かしていくべきかを論じることとする。

「私の個人主義」は、一見すると人間の生き方についての漱石の思想を語っているだけで、福祉思想とは全く関係がないように見える。しかし、深く掘り下げていくと、そこには人間の本来あるべき姿が描き出され、その内容は人間関係、すなわち福祉において対人援助をする際にもっとも必要とされる重要な思想が多く潜んでいることが窺える。

社会福祉においては、社会福祉の目指すところは、

日本憲法第25条「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。」とする国民の生存権の保障、そして国の保障義務がその根幹となっている。社会福祉の理念として最も重要視されているのは、ノーマライゼーションの思想である。中略・・・社会の一員として平等に権利と義務を果たしていけるようにしていこうとする原理である。」¹⁾「権利と義務」、『いわゆる権利を主張すると同時に義務を果たすという思想が重要』であり、対人援助の際、個人尊重、自己決定という原則が守られなければならないが、漱石の「個人主義」にはそのような社会福祉の基本となる思想が見られるのである。

こうしたことを指摘するのも、社会福祉において漱石の「私の個人主義」の思想をいかせるならば、より良い対人援助ができるのではないかと考えるからである。さらに、福祉だけではなく、一般人の基本的なコミュニケーションの取り方にも役に立つのではないかと考えられる。本稿は、「私の個人主義」を通して漱石の文学思想と福祉思想が深く関連していることを実証するとともに、彼の主張が今日生きている人間に示唆している思想を再確認することを目的とするものである。社会福祉において、個人の尊重は対人援助を行う際に最も重要なもので、漱石の提唱した「個人主義」にそのことが含まれていることから、日本に社会福祉が発達する前提を漱石が既に示していたとも言えるのである。

問題が混乱に陥らないために、まず「個人主義」とはなにかを確認しておく。「個人主義」とは「個人の自由と人格的尊厳を立脚点とし、社会や集団も個人の集合と考え、それらの利益に優先させて個人の意義を認める態度」をいい、「ルネサンス及び宗教改革期における個人的・人格的価値の発見により自覚され、社会の近代化の進行に伴って普及するに至った」とあり、「俗に利己主義と同一視されるが基本的に別である」とされている²⁾。

以上が「個人主義」の今日における定義であるが、それでは漱石の「個人主義」はいったいどのような時代において提案されたものなのだろうか。言うまでもなくそれは明治という時代である。私の「個人主

義」が発表されたのは1914年（大正3年）であるが、彼は明治より1年早く生まれ、そして明治とともに生きていた。作品の内容は明治時代の出来事について記述したものである。

日本の開国による西洋文化の到来、日清戦争と日露戦争があった時代であるとともに、天皇の絶対化に見られるような前近代的な思想も強く維持され、「自由」「権利」などという近代思想の取り入れには熱心でなかった時代である。また漱石の「個人主義」の背景には、西洋化＝近代化への動きと、それに反する保守主義との両方がぶつかり合う時代であった。

Ⅱ．先行研究及び考察視点

夏目漱石における「個人主義に関する研究」は、亀山佳明の漱石思想における個人主義から超個人主義への発展過程の論考が代表としてあげられる³⁾。

三好行雄編『漱石文明論集』（岩波文庫）、瀬沼茂樹解説『私の個人主義』（講談社学術文庫）。磯田光一氏の解説『漱石文芸論集』（岩波文庫）がある。漱石の研究は、文化史・文明史的な傾向が一般的である。社会福祉思想に関しては、岡村重夫の「社会福祉原論」、秋山智久、高田真治の「社会福祉の思想と人間観」がある。

池田敬正『日本における社会福祉のあゆみ』⁴⁾では社会福祉の歴史をまとめてある。

本稿は、漱石の「私の個人主義」を通して今まで先行研究にまだ見ない漱石の「私の個人主義」で提唱した1「自己の個性の発展を遂げようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならない。」2「自己の所有している権利を行使しようと思うならば、それに付随している義務というものを心得なければならない。」、以上の2点に対して狭義の社会福祉思想及び日本国憲法との関連性を考察していく。

Ⅲ．漱石の個人主義

1．私の個人主義について

次は以上のことを踏まえて、漱石の「個人主義」がどのようなものであったかを見ていきたい。

漱石は「私の個人主義」において「自己の個性の発展を仕遂げようと思うならば、同時に他人の個性

も尊重しなければならないと言う事」が個人主義の第一の条件であると書いている。更に進んで、「個人主義」を実現するには「いやしくも倫理的に、ある程度の修行を積まなければならない」と述べている。すなわち、漱石のいう個人主義のルールとは、自分の幸福を追求する前提として、“他人の個人主義（自由）も尊重すること”、“倫理的な価値観を持ち、それによって自分を律すること”が出来なければならないということである。これらの条件を満たさなければ、個人主義を实践する資格は無いと主張しているのだ。真の個人主義が相手を自分と同じ「人」として尊重するのに対して、利己主義は自分を特別な存在として「彼も人なり」を忘れ、人の迷惑を顧みることはない。このことを、漱石ははっきり述べているのである。

2. 「私の個人主義」の背景

ここで漱石について少し述べておくと、彼は1867年生まれで1916年に没した作家である。本名は金之助。江戸牛込の生まれ。日本の小説家、評論家、英文学者。東京大学英文科を卒業後、松山で愛媛県尋常中学講師、熊本で五高教授などを務めた後、明治33（1900）年文部省留学生として渡英、明治35（1902）年まで約2年間の留学生生活を終え、帰国後、東京大学にて「文学論」「十八世紀英文学」を講じたことが知られている。その後まもなく朝日新聞社に入り、以後多くの名作を残している。代表作に「吾輩は猫である」「こころ」「明暗」などがある。

では、そうした中で「私の個人主義」はどういう位置にあるかといえ、これは漱石が大正3年（1915年）に学習院で行った講演を筆記したもので、48歳の時のものである。つまり没する前の年のものであり、イギリス留学から帰ってすでに15年を経ている。

漱石の「私の個人主義」の概念が形成するのに長い時間がかかり、彼がイギリスの留学をきっかけに、文学は一体どういうものかについて追究するようになり、そして答えを見つけて、日本に戻ってきた。更に15年の歳月がたち、彼の中で「私の個人主義」という概念は完成していた。

明治時代は西洋文明が日本に入り、個人主義が萌生する時期でもあり、漱石が明治時代の日本が西洋

に迫いつこうと必死に進歩を遂げようとしている様子をはかなり批判的に見ていたことは、「吾輩は猫である」などの作品からわかるが、日本の成長が西洋の模倣でしかないことを、留学から帰ってきたとき特に痛感したようだ。明治33（1900）年9月、33歳だった彼は英語研究のため、文部省留学生となってイギリス留学を命じられたのだが、この留学経験が彼の思想の根底をなしているのである。もちろん、漱石自身はイギリスを好んでいなかったことが知られているが、それでもイギリスで西洋的自由と個人主義を知り、それを身に付けて帰国したことも確かであろう。だからこそ、彼は「西洋人がこれは良い詩だと言っても、自分が心からそう思わなければ、受け売りすべきではない。我々日本人は、イギリスの奴隷ではない。一個の独立した日本人である限り、自分のしっかりした見識を持つべきだ」と言うのである⁵⁾。彼は西洋人の近代的個人主義を身に付け、無批判な西洋化の風潮を拒絶する一方、日本の封建主義の残滓を示す「世間」から脱皮を計ろうとしたのである。そういうわけで、「私の個人主義」という講演の中で、旧制高校程度の学生を相手に、いかにして自分が「自己本位」なる個人主義を獲得するに到ったかを述べているのである⁶⁾。彼は「個人主義」とは他人尊重がなければ個人主義など成り立たないことを主張している。

IV. 社会福祉の思想

1. 日本の社会福祉歴史について

日本の社会福祉の歴史を見てみると、池田敬正は『日本における社会福祉のあゆみ』で、次のように述べてある。「日本における救済制度を歴史的に考えるとき、儒教思想に基づく慈恵的な救済政治の役割が大きい。儒教による徳治主義あるいは仁政の問題である。「敬天愛民」という理念がその中心の考え方であった。この考え方は、明治維新によって形成された近代の天皇制国家の救済行政にも大きな影響を与えている。」⁷⁾「八世紀初頭に成立した『日本書紀』にみられる仁徳天皇（五世紀の倭王讃と比定）の詔詞は、儒教の古典である『論語顔淵篇』による造作とされているが、古代専制国家における天皇の道德に基づく政治、いいかえれば、“仁政”を強調する徳政思想を示すものであって、古代

日本の慈恵策を出発させるものであった。」⁸⁾

ここで日本の社会福祉思想を見ると儒教の救済論と言えるだろう。また仏教の慈悲と福祉については「仏教の思想の本格的な形成をもたらした聖徳太子」を挙げられている。

また聖徳太子の憲法第一七条に「十にいう。心の中の憤りをなくし、憤りを表情にださぬようにし、ほかの人が自分と異なったことをしても怒ってはならない。人それぞれに考えがあり、それぞれに自分がこれだと思ふことがある。相手がこれこそといつても自分はよくないと思ふし、自分がこれこそと思つても相手はよくないとする。自分はかならず聖人で、相手がかならず愚かだというわけではない。皆ともに凡人なのだ。そもそもこれがよいとかよくないとか、だれがさだめうるのだろうか。おたがいだれも賢くもあり愚かでもある。それは耳輪には端がないようなものだ。こういうわけで、相手が憤どおつていたら、むしろ自分に間違いがあるのではないかとおそれなさい。自分ではこれだと思つても、みんなの意見にしたがって行動しなさい。」⁹⁾と記述がある。個人尊重という傾向がみられるが、はっきりそのように断言できるものはみられない。

近代社会では明治天皇の慈恵により「恤救規則」が成立した。

2. 社会福祉の基本思想について

現代社会に入り、社会改良と社会問題の普遍化を経て、社会事業思想が形成した。更に社会福祉の理念の形成で「一九四七（昭和二二年）の全国社会事業大会が、新しい社会事業の目的を「国民の一人ひとりが“人たるに値する”文化生活を営める事」（厚生への答申）としていることは重要である。ここで個人の尊厳は提起されている。」¹⁰⁾

社会福祉は広義の社会福祉と狭義の社会福祉があるが、ここでの社会福祉を、日常生活と自立支援を目的とした対人サービス（狭義の社会福祉）¹¹⁾とする。

ソーシャルワークの視点の一番は、あらゆる人間を「すべてかけがえのない存在」として尊重するという立場である。（「日本ソーシャルワーカー協会の倫理綱領」の中より）。二番目は、人間は人格を持った社会的存在として全人的に捉えるという視点

である。三番目は、社会福祉の利用者（クライアント）の主体性を尊重し、最大限の自己決定を尊重するという視点である。四番目として、社会福祉のクライアントとソーシャルワーカーと、社会の変革を通して社会福祉クライアントの問題解決を援助する視点である¹²⁾。これらの中には種々の価値が入っているが、クライアントをかけがえのない存在として尊重するのが基本であることは、漱石が提唱した個人主義と重なることが伺える。

また、社会福祉においては対人援助が重要であるが、これについてアメリカの社会福祉学者であるF・バイステックは、クライアントの欲求をもとに、クライアントとケースワーカーの両方を視野に入れながら援助関係を構築するための七つの原則を明らかにした。その一つが「クライアントの自己決定を促し尊重する」という原則である。クライアントには自己決定を行う潜在能力があり、それを活用する権利を最大限に尊重するべきであるとしている。

尾崎新は『ケースワークの原則』の中でも述べたように「慈善事業は数世紀にわたって、個人が別の個人にサービスを提供するというかたちで活動を進めてきた。」「クライアントを個人として捉えることは、一人ひとりのクライアントがそれぞれに異なる独特な性質を持っていると認め、それを理解することである。また、クライアント一人ひとりがより良く適応できるよう援助する際に援助の原則と方法とを区別して適切に使いわけることである。このような考え方は、人は一人の個人として認められるべきであり、クライアントは「不特定多数のなかの一人」としてではなく、独自性をもつ「特定の一人の人間」として対応されるべきであるという人間の権利にもとづいた援助原則である」

この原則の基本ともいえるクライアントの尊重は、まさしく、漱石の「私の個人主義」の中にある文学思想に一致している。

バイステック個別援助による倫理的な実践原則として次の七つのことを挙げている。七つの原則はケースワーカーの行動原理といってよい。これらの原則はいずれも援助に関する基本的な事実にもとづいた原則であり、ケースワーカーの援助行動に何らかの影響や指針を与え、ケースワーカーの行動を導くものである。このような整理をしてみると、七つ

の原則は、いずれも援助関係を構成する性質であり、要素であると考えることができる。つまり七つの原則は、あらゆる人間関係を良好なものにするという意味では、性質であり、援助関係を構成しているものという意味では、要素である。七つの原則は①個別化②意図的な感情表現③統制された情緒関与④受容⑤非審判的態度⑥クライアントの自己決定⑦秘密保持¹³⁾ 14)。以下、漱石の「私の個人主義」に関連の深いもの①③④⑤⑥について説明する。

まず、①クライアントを個人として捉える「個別化の原則」である。クライアントを個人として捉えることは、一人ひとりのクライアントがそれぞれに異なる独特な性質をもっていると認め、それを理解することである。また、クライアント一人ひとりがより良く適応できるよう援助する際に、それぞれのクライアントに合った援助の原則と方法を適切に使いわけることである。これは、人は一人の個人として認められるべきであり、単に「一人の人間」としてだけではなく、独自性をもつ「特定の一人の人間」としても対応されるべきであるという人間の権利にもとづいた援助原則である。

③「統制された情緒関与の原則」は、ケースワーカーが自分の感情を自覚して吟味する。これはまずクライアントの感情に対する感受性を持ち、クライアントの感情を理解することである。そしてケースワーカーが援助という目的を意識しながら、クライアントの感情に、適切なかたちで反応することである。

④「受容の原則」とは、援助における一つの原則である。クライアントを受けとめるという態度ないし行動は、ケースワーカーが、クライアントの人間としての尊厳を尊重しながら、彼の健康さと弱さ、また好感をもてる態度ともてない態度、肯定的感情と否定的感情、あるいは建設的な態度または行動と破壊的な行動などを含め、クライアントを現在のありのままの姿で感知し、クライアントの全体にかかわることである。

⑤「非審判的態度の原則」はもっとも重要で、クライアントを一方的に非難しない態度は、ケースワークにおける援助関係を形成する上で必要な態度の一つである。この態度は以下のいくつかの確信にもとづいている。すなわち、ケースワーカーは、クライ

エントに罪があるのかないのか、あるいはクライアントがもっている問題やニーズに対してクライアントにどのくらい責任があるかなどを判断すべきではない。しかし、われわれはクライアントの態度や行動を、あるいは彼が持っている判断基準を、多面的に評価する必要はある。また、クライアントを一方的に非難しない態度には、ワーカーが内面で考えたり感じたりしていることが反映され、それらはクライアントに自然に伝わるものである。

⑥「自己決定の原則」とは、クライアントの自己決定を促して尊重するという原則は、ケースワーカーが、クライアントの自ら選択し決定する自由と権利そしてニーズを、具体的に認識することである。また、ケースワーカーはこの権利を尊重し、そのニーズを認めるために、クライアントが利用することのできる適切な資源を地域社会や彼自身のなかに発見し活用するよう援助する責務をもっている。さらにケースワーカーは、クライアントが自身の潜在的な自己決定能力を自ら活性化するように刺激し、援助する責務をもっている。しかし、自己決定というクライアントの権利はクライアントの積極的かつ建設的決定を行う能力の程度によって、また、市民法、道徳法によって、さらに社会福祉機関の機能によって、制限を加えられることがある。

そこで、これらの中の「個別化の原則」「自己決定の原則」が漱石の個人主義に大いに関連性があることを確認したい。それらを漱石自身の言葉にすると以下になるであろう。

1 「自己の個性の発展を遂げようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならない。」

2 「自己の所有している権利を行使しようと思うならば、それに付随している義務というものを心得なければならない。」¹⁵⁾

こうした漱石の言葉は組織に所属する者にはなかなか判りにくいかもしれないが、漱石が提示する「個人主義」は決して自分勝手に何をしてよいというものではなく、常に自己責任と義務を伴うものであり、また同時に他人の個性をも尊重しなければならないものでもある。

ここでは、自分が生きる道は、他人に従い、他人

の価値観に引きずられて生きるのではなく自分で見出すものだ、と個人主義の出発点を説いていることに注目したい。その出発点に立てたら、あとは自分の仕事に邁進することが大事であり、そうしなければ一生の不幸であると述べているのである。こうした思想は社会福祉においても重視されている個人の尊重であるが、その意味で、社会福祉思想が日本で普及するのに先んじて、既に漱石の作品の中でその思想を見出すことが出来たのである。

V. 漱石の思想を社会福祉思想の観点から見る場合

先に引用した漱石の言葉1「自己の個性の発展を遂げようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならない」について、「私の個人主義」から具体例を引用して、社会福祉思想の観点から分析してみる。

「私の知っているある兄弟で、弟の方は家に引込んで書物などを読む事が好きなのに引き易へて、兄は又釣道楽（つりどうらく）に憂身（うつみ）をやつして居のがあります。すると此兄が自分の弟の引込思案でただ家にばかり引籠っているのを非常に忌（い）まわしいもののように考へるのです。必竟は釣をしないからああいう風に厭世的になるのだと合點（がてん）して、無暗に弟を釣に引張り出そうとするのです。弟は又それが不愉快で堪らないのだけれども、兄が高壓圧的に釣竿を擔（かつ）がしたり、魚籃（びく）を提げさせたりして、釣堀へ隨行を命ずるものだから、まあ目を瞑って食つ付いて行って、氣味の悪い鮒（ふな）などを釣つていやいや帰ってくるのです。それが爲に兄の計畫通り弟の性質が直つたかといふと、決してそうではない、益此釣（ますますこのつり）といふものに対して反抗心を起してくるようになります。つまり釣と兄の性質とはぴたりと合つて其間（そのあいだ）に何の隙間もないのでしょが、それは所謂（いわゆる）兄の個性で、弟とは丸で交渉がないのです。是は固（もと）より金力の例ではありません、權力の他を威圧する説明になるのです。兄の個性が弟を壓迫して、無理に魚を釣らせるのですから。」¹⁶⁾

この文章では、弟が人と付き合うことが苦手で家

れを見兼ねて、釣りでも連れて行けばきつと楽になると思い込んで無理やり誘うが、逆に弟にとって釣りに行く時ほど苦痛を感じたことがないという話で、いくら弟のためとは言え、兄の計画がうまくいくはずがないことが示されている。これを社会福祉対人援助の場面におけるバイステック原則から分析してみると、以下のようになろう。

まず、この文章には社会福祉対人援助において、「個別化の原則」、「受容の原則」、「自己決定の原則」の三つの原則が含まれている。そして、「個別化の原則」の裏には人間尊重という原則が働いていることから、漱石には人間尊重の精神が根付いていることもわかる。他方、そこには対人援助で重要な「自己決定」の原則も含まれている。というのも、漱石は、「兄は弟が家に引込んで書物を読むことが好きだという事」を意思尊重していないことを指摘しているからである。相手の意思を尊重しないまま支援をしようとしてもうまくいくはずがないことは、福祉の対人援助における常識である。

また、「受容の原則」であるが、前述したように、クライアントの長所と短所、好感の持てる態度と持てない態度、肯定的感情と否定的感情、建設的な態度と行動及び破滅的な態度と行動などを含んで、道徳的な批判などを加えずに、あるがままのクライアントをそのまま受け入れるということである。漱石の言う「弟」をクライアントとし、「兄」をソーシャルワーカーとした場合、社会福祉の対人援助をする際にまずクライアントのことを尊重したうえで、クライアントが本当にしたいことが出来るようにその環境を整えることが一番大事だと漱石は考えているのである。「自己決定の原則」とは、あるものを選択したり決定したりする主人公はクライアント本人であつて、援助者ではないとするものである。

「弟」を尊重することで、初めて家で本を読むことが引きこもりではなく、本人のやりたいことなのだと理解できる。すなわち、相手のことを考えずに勝手に無理やり釣りに連れて行く必要などなく、家で好きなだけ本を読ませてやることが「兄」が「弟」に対しての思いやりを実践することになるのである。「社会福祉法」の前身となる「社会福祉事業法」が出来たのは、昭和26（1951）年なので社会福祉概念がなかった明治時代に、漱石の作品に既に

社会福祉援助技術の真髓が見えたということは、ある意味で驚きである。真の福祉精神が漱石の根底に見出すことができる、と言っても過言ではない。

社会福祉の対人援助においては、クライアントが望んだ幸せと援助者が考えてあげた幸せとは必ずしも一致していない、というより人間は本来それぞれ考え方が違うので、むしろ一致しない場面のほうが多いと考えられる。そこでクライアントの意思を尊重することによって、初めて望まれた援助を実現することができるのである。

次の漱石の文章も、社会福祉思想の観点から見た場合、重要な意味がある。

「自分がそれだけの個性を尊重し得るように、社会から許されるならば、他人に対してのその個性を認めて、彼らの傾向を尊重するのが理の当然になって来るのでしょう。それが必要でかつ正しいこととしか私には見えません」¹⁷⁾。

ここでも漱石は、まるで社会福祉の対人援助の原則について先見の目があるように思える。他人の個性を尊重することが個人主義の真髓だと訴え続ける漱石が、はっきり見えてくるからである。

社会福祉思想における「個人の尊重」とは、一人ひとりの人間を自立した人格的存在として尊重するということであり、一人ひとりがそれぞれに固有の価値を持っているという認識を前提に、それぞれの人が持っている価値を等しく尊重しようというものである。平たくいえば、一人ひとりの人間を大事にする、ということである。それは、一人ひとりが「違う」存在であるということ認め合い、その「違い」をそれぞれに尊重することでもある。日本ではしばしば「平等」ということを「みな同じ」という意味合いで語ることが多いが、「平等」とは、本来、「人はみな同じだから平等でなければならない」のではなく、「人はみなそれぞれに違うからこそ平等でなければならない」というものとして捉えられるべきものである。つまり、一人ひとりの人間は、みな、それぞれに違うのであり、一人ひとりが他者とは違った価値を持っているから、それぞれの人が持っているそれぞれに異なった価値を等しく尊重しよう、というのが「個人の尊重」原理の上に立った「平等」の考え方なのである。

ところで、「個人の尊重」は「個人主義」の社会

を前提としている。「個人主義」は、これも日本では誤解されやすいが、「利己主義」ではない。「個人主義」の社会とは、「自立した個人」を構成単位とする社会のことで、そこでは、当然、他者もまた「自立した個人」として存在することが自明の前提となっているから、自分のことだけで他人のことは考えない「利己主義」は通用しない。西欧においては、封建社会が崩壊していく過程のなかで、自然発生的に「自立した個人」が生まれ、そういう「個人」が主体となって近代社会を形成してきたという歴史があるが、日本の場合には、「個人」が成熟することなく「上からの近代化」が推し進められ、「個人主義」の社会になりきらないままに、今日までできている。したがって、「個人主義」社会を前提とする「個人の尊重」原理も、なかなか理解されにくい面があることは否定できない。しかし、人権、平和、国民主権という価値を是とする以上は、日本人にとってその共通の根っこともいえるべき「個人の尊重」原理の理解を深めることは必要不可欠だといえよう。次代を担う中学生・高校生に「個人の尊重」ということの意味を正しく伝えることが、憲法教育の重要な意義だと考える。

VI. 考察と分析

周知のように、日本に「社会福祉法事業法」（2000年に「社会福祉法」に改正した）が制定・施行されたのは1951年である。

「社会福祉事業法」が「社会福祉法」に改正したことは、行政が行政処分によりサービス内容を決定する措置制度からクライアントが事業者と対等な関係に基づきサービスを選択する利用制度に変換した¹⁸⁾。

措置制度から契約制度に変換したことで、福祉サービスクライアントと呼称され主体性がより強調されるようになった。「クライアントの意向に十分尊重し」¹⁹⁾や「クライアントの立場にたって」²⁰⁾と書いてあるように、社会福祉の中に夏目漱石の「私の個人主義」にある個人尊重が流れている。

福祉サービスの基本理念として、「福祉サービスは個人の尊厳を保持し、その内容は、福祉サービスのクライアントが心身ともに健やかに育成され、又はその有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるように支援するものとして、良質かつ適

切なものでなければならない。」²¹⁾

また岡村重夫は、社会福祉援助の原理の一つとして主体性の原理を挙げている²²⁾。

生活主体者はただ受動的にサービスを受けるのではなく、クライアントの自己決定によるサービスを選択されることがクライアント主体原理につながるが、これは生活主体者の権利主張の根拠となるだけではなく、同時に生活主体者が社会人としての責任主体であることを示すものである。²³⁾

「支える」ということが実は「支えられる」とことだということは、なかなか気がつきにくいことなのかもしれない。しかし、それが互助の精神であり、人権の尊重になるのである。互助、人権の尊重こそが社会保障制度の仕組みの基礎である「福祉は公共事業より雇用を生む」²⁴⁾。福祉の個別化・受容・自己決定などの原則の背後には、人間尊重の原理が働いているのである。福祉の心、社会福祉の価値観は、他者に対する価値観である。

クライアントの主体性については、リッチモンドが「ケースワーカーは哲学をもたなければならない」として明確にした基本原理の一つに、「人間は依存的な動物ではなく、それぞれ自分自身の意志と役割をもっている。ゆえに、人間が受動的であることは墜落を意味する」というのがある²⁵⁾。これは人間の能動性、自律的選択による主体選択の重要性を意味していよう。

そしてリッチモンドはソーシャル・ケース・ワークの定義を「ソーシャル・ケース・ワークは人間と社会環境との間を個別に、意識的に調整することを通してパーソナリティを発達させる諸過程から成り立っている。」²⁶⁾としている。

なおここでリッチモンドは、「パーソナリティは、個性と違って、はるかに包括的な用語である。ある人にとって生来的個別的であるものすべてでなく、教育、経験、人間的交際を通じて身につけているものすべてを意味している。」²⁷⁾と述べている。

リッチモンドソーシャル・ケース・ワークが支援する際クライアントの主体性を尊重する時、主体性所謂クライアントのパーソナリティについてその意味を十分理解する必要があると主張した。

バイステックは、クライアントの自己決定の重要

性をいい、「人は自己決定を行う、生まれながらの能力をもっており、それゆえ、ケースワーカーがクライアントの自由を意識的に、故意に侵害することは、クライアントの自然の権利を犯し、ケースワークの処置を損ない、不可能にする」としている。自己決定は人間尊重を具体化したものであり、その根底には自由主義、民主主義の思想があり、ソーシャルワークにおいてももっとも高い価値とみなされているのはいうまでもない。²⁸⁾ クライアントの主体性を尊重するという原理は、ソーシャルワークの生成発展の中で中核的価値とみなされてきたのである。

ここでも漱石の「私の個人主義」と重なるが、「個人主義」は、「利己主義」ではない。「個人主義」の社会とは「自立した個人」を構成単位とする社会のことで、そこでは、当然、他者もまた「自立した個人」として存在することが自明の前提となっているから、自分のことだけで他人のことは考えない「利己主義」は通用しない。憲法教育においても、先覚者である夏目漱石の「個人主義」はきわめて重要なのである。

というのも、漱石の「私の個人主義」に提唱されている項目は、社会福祉思想にも現行憲法にも反映されているものだからである。

社会福祉においても、「日本の社会福祉思想と価値には日本の社会、文化、宗教と結びついた歴史的原型があるが、戦後社会の基本となるものとして、いうまでもなく日本国憲法、福祉3法がある。」²⁹⁾

「日本国憲法」における徹底的な人権主義に基づく格調高い福祉主義思想は第3章「国民の権利と義務」、とりわけ、憲法第13条に「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」とある³⁰⁾。

人権は、近代市民革命を経て、特定の身分を持った人の特権から、一人ひとりの個人の人権へと発展してきた。個人に着目することこそが、近代憲法の本質なのである。あくまでも個人のために国家は存在するのであって、けっして国家のために個人があるのではない。誰もがかけがえのない命を持った具体的な個人として尊重される。お互いの違いを尊重し合い、人種、信条、性別などを越えて、多様性を

認め合う社会を憲法はめざす。

漱石は国家主義に関する見解は「国家の平穏な時には、徳義心の高い個人主義にやはり重きをおく方が、私にどうしても当然のように思われます。」とある³¹⁾。ここでは、国家主義に対して反発し、国家的道德よりも個人的道德のほうに優位性を認める漱石であったが、こうした信念の背景には、国が優れたものになるためには個人が優れたものにならないといけないということが含意されていた。

漱石は「私の個人主義」の中で、国家主義と個人主義の関係について「事実私共は国家主義でもあり、世界主義でもあり、同時にまた個人主義でもあるのであります。」³²⁾と述べている。ここでは、漱石は国家主義も大事だが、それよりも個人主義のほうの方が大事だということを述べている。個人主義が優れた方が国の発展にもつながる。

すべての人々が生まれながらに有する権利も、生まれてすぐに自らの権利を主張し、行使できるわけではない。両親や家族等、周囲の人々によって保護され、他律的に生活行動が導かれる時期を経ることによって、やがて自律的な行動へと変化し、権利の主体としての人格が形成されるのである。しかし、権利の主体としての人間的成長が順調に行かない場合も起こり得るし、幼弱、老齢、病弱や障害、その他の事情により自らの意思や力で自らの権利を主張し、行使し、確保することが困難な場合もあり得る。そのために人々は支え合い、協力し合い、次世代に希望を託し、理想を追求し、より良い生活環境を整備するための努力をするのである。つまり、権利の確保には、そのための努力と果たすべき責任を負う義務があるということだ。

人はみな権利の主体であると同時に、義務の主体でもある。支えられる権利を有する一方で、支える義務を有する人々で構成されているのが「社会」なのである。そういう社会こそ、「共に生きる」、「共に学ぶ」ことの可能な社会なのだ。

VII. 終わりに

上述したように、夏目漱石の「私の個人主義」が発表されたのは1915年である。そして現行の「日本国憲法」が制定されたのは1948年であることから、「社会福祉法」や「日本国憲法」中の個人尊重、権

利と義務、責任について主張した思想は、夏目漱石の「私の個人主義」の中で見出すことが出来るということができる。彼の思想は今の時代にも必要とされるものであり、かつまた生き続けているものなのである。

夏目漱石の「私の個人主義」にある思想に見出される福祉思想の可能性を論じてきた。今の日本社会は福祉面では超高齢社会に進んでおり、身体面、精神面に障がいをもっている方の支援が求められ、対人援助向上を余儀なくされているとともに、これから更なる福祉を担う人材が必要となっている。社会福祉の対人援助分野では、漱石の「私の個人主義」に見られる「個人尊重」を最大限に活用すれば、より良い対人援助ができると同時に、一般的に人と人とのコミュニケーションもうまく取れるようになり、ノーマライゼーションが進んで、誰もが住みやすい社会の実現も可能に近づいていくのではないかなと思われる。

社会福祉に携わっている方は、夏目漱石の「私の個人主義」に含んでいる社会福祉の対人援助の基本思想ともいえる社会福祉思想を理解することが、大いに参考になるとと思われる。

これからは私たちが、普段の生活場面においても、漱石の「私の個人主義」からの示唆を生かすべきである。

【引用文献】

- 1) 岡村順一編 P. 44 法律文化社『社会福祉原論』1994年
- 2) 広辞苑
- 3) 亀山佳明『夏目漱石と個人主義－“自律”の個人主義から“他律”の個人主義へ』、新曜社 2008年。
- 4) 池田敬正『社会福祉の歩み』法律文化社 1996
- 5) 夫伯 (2000) 「夏目漱石」『吾輩は猫である』主題論『日本文学報 第9集』韓国 日本文化学会
- 6) 高 継芬 山本 孝司 V. 13 No. 1 漱石「個人主義」思想の自峙論的要素－アメリカの超越主義からの影響を探る。P. 47 九州看護福祉大学紀要
- 7) 池田敬正『社会福祉の歩み』P. 20法律文化社 1996
- 8) 池田敬正『社会福祉の歩み』P. 22法律文化社 1996
- 9) 十七条の憲法 www.geocities.jp/tetchan_99_99/international/17_kenpou.htm

- 10) 池田敬正『社会福祉の歩み』P.181 法律文化社1996
- 11) 岡村順一編 P.15『社会福祉原論』法律文化社1994
- 12) 秋山 智久/高田真治編著「社会福祉の思想と人間観」P. 24 ミネルヴァ書房 1999
- 13) F・P・バイステック著 尾崎新ほか訳『ケースワークの原則』P36 誠信書房 2000
- 14) F・P・バイステック著 尾崎新ほか訳『ケースワークの原則』P.77 P.113 P.141P.164誠信書房 2000
- 15) 漱石全集「私の個人主義」P. 636ちくま文庫 2000
- 16) 漱石全集「私の個人主義」P. 631ちくま文庫2000
- 17) 漱石全集「私の個人主義」P. 633ちくま文庫2000
- 18) 厚労省社会福祉の増進のための社会福祉事業法の一部改正する等の法律案の概要
- 19) 社会福祉法第5条 2000年
- 20) 社会福祉法第80条 2000年
- 21) 「社会福祉法」 第3条 2000年P. 99
- 22) 岡村重夫『社会福祉原論』年P. 100 全国社会福祉協議会1983
- 23) 岡村重夫『社会福祉原論』年P. 100 全国社会福祉協議会1983
- 24) 「社会福祉の原理と思想」 岩田正美 P. 116 有斐閣 2003年
- 25) 秋山 智久/高田真治編著「社会福祉の思想と人間観」P. 12ミネルヴァ書房1999
- 26) メアリー・E・リッチモンド著 小松 源助訳「ソーシャル・ケース・ワークとは何か」P. 57 中央法規1997
- 27) メアリー・E・リッチモンド著 小松 源助訳「ソーシャル・ケース・ワークとは何か」P. 55 中央法規1997
- 28) 秋山 智久/高田真治編著「社会福祉の思想と人間観」P. 137 ミネルヴァ書房1999
- 29) 秋山 智久/高田真治編著「社会福祉の思想と人間観」P. 138 ミネルヴァ書房1999
- 30) 2008. 7. 27 朝日新聞
- 31) 漱石全集「私の個人主義」P. 646ちくま文庫2000
- 32) 漱石全集「私の個人主義」P. 642 ちくま文庫2000